

大聖堂のある街で

第2話 リカ



堀田耕介

リカ

朝、目が覚めるとえっちゃんはまだもう帰っていた。お父さんは自分の部屋で寝息を立てている。お父さんは7時には帰って来るけど、細かい仕事はぼくが寝た後、朝までやっている。昨日はえっちゃんと話しこんでたから、そのあとの仕事はたいへんだっただろうな。いつもぼくはお父さんを起こさないで、お父さんの作っておいてくれた朝ごはんを食べて、学校に出かけている。

階段を1階まで駆け降りて、大聖堂への坂道を登っていく。

「ユキ、おはよう！」

「おはよう、しんちゃん。」

「今日、学校が終わったらエリオットの丘に行かないか？何かすごい風を上げてる人がいるんだってさ。」

「風？」

「うん、丘の上で、百も二百もつなげた風を上げてるんだって。あの丘には上昇気流があるからすごく

上がるんだってさ。人の乗った凧も上げてるんだってよ。」

「へー。」

でも今日は、学校が終わったらすぐラプラス通りに行きたい。昨日見た女の人に会えるかもしれないから。

「ごめん、今日は学校が終わったらすぐ、えっちゃんのうちに行かなきゃいけないんだ。」

「ええ？だって凧の人、今日行かないといなくなっちゃうかもしれないぜ。」

「うーん、ぼくも見たいけど、今日はだめなんだ。」
「ふーん。しょうがないなあ。じゃあ、りっちゃんたち
と行くからいいや。」

「ごめんね。」

大聖堂の横にぼくたちの学校がある。毎朝司祭
さんがやってきて朝のお祈りをする。そのあと一時
間目は国語、二時間目は算数、三時間目は科学
で、四時間目は神さまの話か世の中の話。毎日同
じ順番で、お昼には終わる。正午のお祈りが終わ

ると、子どもたちが大聖堂の前の広場に飛び出してくる。みんなそのあたりで缶けりをして遊んだり、紙芝居を見たり、親と一緒に働いたり、エリオットの丘やミッドランド川に遊びに行ったりする。いつもぼくはしんちゃんやりっちゃんと一緒に遊んでい
るんだけど、今日はそんなこととしてられない。お昼
のお祈りが終わるとすぐ、大急ぎで家に戻った。お
父さんは起きだして、出かける準備をしていた。

「ただいま。」

ぼくは大急ぎで靴を脱ぐ。

「遊びに行くのか。」

「うん、ラプラス通りで待ち合わせしているんだ。」

「えつことか？」

「違うよ。キリヤ。」

ぼくはコーシー広場でアイスクリームを売ってる同級生の名前を出して、話をでっち上げた。

「じゃあお父さんと一緒に行くか？」

「ううん、お昼ご飯を大急ぎで食べて、すぐ行くから。」

「なんだせわしないな。」

お父さんは笑った。

「そこにパスタ作っておいたから、ゆっくり食べて
け。」

ぼくは大急ぎでお皿に盛って、口の中にパスタを
詰め込んで、紅茶で流し込んだ。

「じゃあ行ってきまーす！」

「あんまり慌てて転ぶなよ。」

「大丈夫！」

と言いながら、ぼくは階段を駆け降りる途中で転
びそうになった。

ぼくは走って市庁舎まで行った。広場は鳩が群れていて、ぼくが近づくと一斉に飛び立った。海に向かって真っすぐ伸びるラプラス通りに入ると、きれいなお店が並んでいる。あの人は、こんな店で働いているんだろうか。ぼくは一軒一軒、お店をのぞいていった。どの店にもきれいな女の子がいたけど、ぼくの探している人はいなかったし、ぼくの探している赤いコートの女の子が一番きれいだと思った。フランクリン時計店の前に来ると、店の奥で鼻髭を

生やしたおじさんが時計を見ていた。お父さんが来るのを待ってるのかもしれない。ぼくはそつと通り過ぎて次の店の前に行った。

だんだん高級品の店が多くなってくる。ぼくは学校帰りのままで、白いシャツに黒の半ズボン。ちよつと気が引けてきた。歩道のベンチに座り込んで、空を見上げた。ああ、やっぱりそう簡単には見つからないよなあ。空は真っ青で、飛行機雲が西から東へ、まっすぐに伸びていた。しんちゃんたち、凧を見られたんだろうか。凧を上げてるのってどんな人

なんだろう。こんなことなら、ぼくも一緒に行けばよかつたかな。

ぼくは首を振って立ちあがった。ううん、あの人はきつと見つかるさ。でも見つけてどうする？どうするって言うても：胸がときどきした。何を期待してるんだろう。本屋の店先でただぶつかっただけの子どものことなんか、覚えてるはずもないのに。

ぼくは首を振った。ううん。それでも、あの人に会いたい。

ぼくはまた歩き始めた。バス停があつて、何人か

の人がバスを待っていた。それを何の気なしに見ると、昨日の白いコートの女の人がバスに乗り込むのが見えた。ぼくはどきつとした。

「待って！」

ぼくは走った。でもバスは動きだしてしまった。窓から、あの女の人が吊革につかまっているのが見える。ぼくは追いかけた。でもバスはぼくに構わずに、排気ガスの匂いを残して行ってしまった。はあはあ息を吐きながらぼくが膝に手を突いて立っていると、小さな女の子がぼくに話しかけてきた。

「これ、あげる。」

女の子は、温かいレモネードをぼくに差し出した。

「ぼくにくれるの？」

「うん。」

「なんで？」

「女の子にプレゼントをもらって理由を聞くなんて野暮ね。ありがとうって言うてもらえばいいのよ。」

ぼくはびっくりした。

「ありがとう。」

女の子は満面の笑みを浮かべて言った。

「それでいいのよ。どういたしまして。」

お母さんはどこかそのへんにいるんだろうか。ぼくがきよろきよろすると、

「誰を探してるの？」

「きみのお母さんはどこにいるの？迷子になってない？」

女の子は笑い出した。

「迷子になってるのはあなたの方じゃない。私は迷子になんかなってないわ。」

「でも、一人でこんなところにいて、大丈夫？」

「大丈夫よ、人の心配より自分の心配したら？」

「自分の心配って……」

「あなた、誰か探してるんでしょ。」

「どうして分かったの？」

「誰が見たってわかるわよ。お店を一軒一軒のぞいで、バスを追いかけたりすれば。」

「そうだあの人、せつかく手掛かりを見つけたのに。」

「あの人に聞いたってだめよ。あなたの探している人

は見つからないわ。」

「ぼくが誰を探してるか知ってるの？」

「赤いコートを着た素敵な人でしょ？」

ぼくは驚いた。

「どうして知ってるの？」

女の子は得意げな顔をした。

「ふふ。内緒。」

「君は誰なの？」

「私リカちゃん」

「お人形みたいな名前だね。」

「私のパパが、私に似せてお人形を作って、それをおもちや屋さんで売るようになったのよ。だから私が本物のリカちゃん。」

「ほんと?」

「本当だったら面白いでしょ? だったら本当なのよ。」

「ええ、じゃあうそなの?」

「本当だって言ってるでしょ。」

「それに何でそのリカちゃんがこんなところにいるのさ。」

「お友達のところ遊びに行くのよ。」

「お友だち？」

「リカちゃんのお友達はワタルくんが決まってるですよ。」

「きまってるんだ。」

「きまってるのよ。それでパパったら、ワタルくんのお人形も作ったのよね。そうしたらうちのお兄ちゃんがワタルくんのお人形を裸にして、おちんちんがついてない！っていうの。」

「ああ、誰か言ってた。おちんちんついてないからこ

の子は男の子じゃないって。」

「ばかねえ。女の子のお人形にそんなものつけたら大変なことになるでしょ。」

「どうして?」

「みんな、きやあ変! って言って、取っちゃうもの。」

「う。痛い。」

「どこ押さえてるのよ。あなたのおちんちん取るわけじゃないから大丈夫よ。」

「取られたら困るよ。おしっこできない。」

「もつとほかのこともできないでしょ。」

「ほかのこと？」

「ああ、子どもにそんなこと言っちゃだめよね。」

「そんな、君に子ども扱いされたくないよ。」

「男の子って子どもなんだから。」

「君何歳なの？ませた口ききすぎだよ。」

「私はねえ、はっぴやく、ろくじゅう、ごさい。」

「なにそれ。」

「あの時計塔を見て。」

リカは市庁舎を指さした。

「あの時計塔は、私が3歳のときに来たの。それ

が862年前よ。それから100年から200年に一度、時計は作りかえられてきたの。」

「今度、ぼくのお父さんが作るんだよ。」

「知ってるわ。あなたのお父さん、この街で一番の時計職人だもの。街中の職人と一緒に、金色のぴかぴかの文字と針、それに文字盤。生まれ変わるのが楽しみだわ。」

「君、何でも知ってるんだね。」

「何でも知ってるのよ。865歳だから。」

「君は不老不死なの？」

「あら難しい言葉知ってるわね。不老不死ってわけじゃないけど、でも似たようなものかもしれないわ。」

大聖堂から、1時の鐘の音が聞こえた。

「私もう行かなきゃ。ワタルくんに怒られちゃう。」
「何でもわかるなら、ぼくがあの人に会えるかどうかわかる？」

リカは笑った。

「さあね。でも探し続けていれば、思いがけないときに会えるわよ。探すのをやめたら、もう見つからな

い。人生ってそんなものでしょ？」

「12歳の子供に人生を語らないでよ。」

「じゃあね！」

リカは駆け出した。と見る間に、ふっと消えていなくなってしまうた。

「なんだったんだ、今は……」

ぼくは空を見上げた。さっきの飛行機雲が、もうだいぶ形が崩れて、青い空に溶けて行っていた。

大聖堂のある街で 第2話 リカ

<http://p.booklog.jp/book/44265>

著者：堀田耕介

著者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/kous37/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/44265>

ブックログのpapier本棚へ入れる

<http://booklog.jp/puboo/book/44265>

電子書籍プラットフォーム：ブックログのpapier（<http://p.booklog.jp/>）

運営会社：株式会社paperboy&co.